

---

# 元勇者の普通の生活

野瀬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

元勇者の普通の生活

### 【Zコード】

Z6949F

### 【作者名】

野瀬

### 【あらすじ】

異世界で勇者だった少女が、日本へ戻ってまつたり日常を過ごします。お話。時々事件が起きたり、時々思わず戦っちゃったりします。

## 1・プロローグ

青く光る魔術の灯火。これを見るのも今日で最後なのだと思つと、言い知れぬ寂しさが押し寄せてくる。

最初に”こちらの世界”へやつて来た時に見た部屋は、あの時と何も変わつていない。光は青白い光のみで、薄気味悪い印象。床には魔法円陣が精密に描かれ、儀式めいた杖を持つ一人の男 魔術師長が、こちらを見てにこりと笑う。

日の光の下でなら、もつときらきらと輝き心が明るくなるであろう優しい微笑み。私を好きつて言つてくれたはじめての男の人。結局私は、彼の想いには応えられなかつた。どうしても、彼を恋愛対象として好きと思えなかつた申し訳なさが、ちょっとだけもやもやと残つてゐる。この期に及んで未だに直視できなくて、その向こう側にいる人物へ視線を移した。

目があつた瞬間彼はからかうようにくすりと笑い声を立て、それからきりつと”王の顔”になつた。

おもむろに床に膝をつき、頭を垂れる。 私はそれを見ても、もう焦ることも無い。当たり前とも、そうするべきとも思わないけれど、ここで私が狼狽てしまつてはいけないことを知つてしまつたから。

先日着任の議を行つたばかりの新米国王陛下は、威厳ある声音で持つて私に語りかけた。

「本当に貴殿にはどんなに礼を尽くそうとも、言い足りぬ。まさに救世主、勇者の冠にふさわしい。我々の数々の無礼、お許しいただきたい。本当に何から何まで世話になつた。国を代表し、サヤカ・オオボリ殿 わが国の勇者殿に心からの感謝を」

大げさな物言いは、儀礼的な意味も含まれてゐるからだろう。けれど、最後にイタズラっぽく笑つた彼の、王子様であつた頃の面影が見えた気がして、嬉しかつた。

私は彼の視線に合わせてつい膝を曲げてしまう。本当はいけないつて知つてゐるけど、今だけはこゝをせでね。

「顔を上げてください、国王陛下」

素直にこちらを見上げる彼に、頭を下げる。

「こちらこそ、ありがとうございました」

お辞儀をして顔を上げると、田代が合つた陛下は困つた顔をしていた。その表情はもう、”陛下”ではなくなつてしまつていて。

「最初はどうであれ、私、この世界に来れてよかつたつて思つてゐる。マテウスやディルク、ハンネ様やカヤに、オーレンドルフさん、ミラリズ皇國の方々や、テオドール棟梁。たくさんの人々に会えて、色々なことを体験して。大変だつたけど、あつたかいものもいっぱい貰つたんだ。だから つ……」

やばい、泣きそう。

もう一度と会えないのだ。商店街の皆や、世間話をした侍女達、つるさい大臣達にも。一度と見ることはかなわないのだ。美しい町並みも、王宮の夜会も、賑やかな酒場も。全部、日本には、地球上になくなつてしまつてゐるのだ。

一度、息を大きく吸う。

マテウスが、困つた顔からしようがないなあ、といつお兄さんの顔になつてゐた。ああ、やつぱりこの人は優しい。優しい、いい王様になる。

「だから、マテウス陛下、ディルク魔術師長も、ありがとうございました」

精一杯の笑顔で言つて、もう一度深く頭を下げる。

「サヤカ」

優しい声音で名を呼ばれる。今までずっと無言だつたディルクが、下げつ放しの私の頭をぽん、と優しく撫でてくれた。もう、駄目だ。涙が止まらない。

私は、この国が、この世界が、大好きでたまらないんだ。離れたくなくて、だけど故郷にも帰りたくて。どうして、行き来できない

のだろう。なぜ、永遠の別れなのだろう。永久の別れの苦しさを、私は知らない。

泣いてぼろぼろの顔なんて上げられなくて、私はそのまま倒れこむようにデイルクの腕にしがみ付いた。

「サヤカ、顔を見せて。一度と見れないのだから、もっとじっくり眺めさせて欲しい」

とろけるように甘い声で、デイルクは言つ。

「でも、私今……」

鼻声で返事を返すと、デイルクの笑う声が聞こえた。

「私は泣いている君すら、愛おしいんだよ」

ああ、こんなに私を好いてくれる人がいる。同じようには返せないと打ち明けてなお、好きだと言つてくれる人がいる。

涙が止まらない。でも、彼の言葉のとおり私達は再び会う事はできないのだ。だったら、今この一瞬を大事にしたい。

恐る恐る顔を上げると、デイルクは当たり前の様に親指で優しく涙を拭ってくれる。

「君の心を手に入れる男は、もちろん私より優秀であるのだろうね」なんて、冗談じみた調子で言つて、ふ、と目を細める。あまりにその瞬間は短くて、何が起きたのかしばらくわからなかつた。

「でい、るく？」

今、頬にキスをされた？

もう何度も色んな人に親愛の証にとされてきたことなのに、なぜか妙に恥ずかしくて、私はまた目をそらしてしまつた。驚いて、涙止まつちゃつたじゃない。

すると唐突に、手に何かを握られた。その感触に驚いて中の物を見る。魔石だ！ それも、これは魔術師長に代々伝わるという特大の白亜石ではないか。手のひらに収まつたその石は青白い光を受けて、きらりと光つた。

「餞別だ。持つて行きなさい」

「だ、駄目だよ！ 大体これは、個人の所有じゃないはずでしょ」

！？ ねえ、マテウスつこれつて……！」

思わず全否定して、傍観者になつていていた国王陛下に声をかける。するとマテウスは肩をすくめて、ニヤリと笑つた。ああ、嫌な笑顔。「俺が許可した。国を救つた勇者殿に謝礼も無しでは、ラロレアの名が廢る。受け取つてくれ」

「で、でも……こんなの、私の世界じゃ使い道もないし……」

魔石というのは、魔術の補助をする道具だ。特に白亜の石は、宿る魔力が高い。故に、私みたいな魔力が無い人間でも使えることは使えるけど……。この国の魔術って、全部戦闘用じゃないか。勇者だつたこの世界でならともかく、刀を持つて歩くだけでつかまる日本でどう使えつて言つんだろうか。

おうおろする私を見て、マテウスは面白そうに笑つた。人が悪いつたらない。誰よ、彼を優しいなんて言つた人。

「使わなくていい」

別のところから答えが返つてきて、私はそちらを見上げる。デイルク、顔近いよ。

「君が、これを見て時々私のことを思い出してくれるなら、それだけで嬉しい」

うう。

それはつまり、遠まわしに好きだ、って言われているんだよね。自惚れでは無いことを、じつと見つめてくる彼の目が証明している。「余計に駄目だよ。デイルク、私はあなたが私を想ってくれるようにな、あなたを好きにはなれない。だからこれは受け取れない」

「それでもいい、持つていってくれるだけでいい……と言つても？」

切なげに揺れる、紫色の瞳。

私より年上のくせして、こんな目をするのはずるい。捨てられた子犬を髪髪させるんだもん。ため息が漏れる。

「……また、そーゆーことを……私としてはかなり困るんだけどな

「私が勝手に君を好いてやつてのことだから、困つてくれるのも

嬉しい」

甘く微笑むディルクの目は、まだ少しだけ寂しそう。彼の想いに応えられない負い目もある。

私は結局頷いてしまっていた。

「わかつたよ、もううから。……ありがとう、大事にするね」  
石をぎゅ、と握り締める。帰つたら、何かのアクセサリーに加工しよう。

「どうか元氣で。サヤカの笑顔が絶えず続くことを、切に願つてい  
るよ」

「お前が故郷で健やかにあるように祈つてゐる。その活躍は、国を  
救つた勇者として王家に代々伝えていこう」

国王陛下の申し出は、そんなに大げさにしないで欲しい、とは言  
えない雰囲気だつた。曖昧に笑つて頷く。なんか、ものすごい脚色  
されちゃうような気がするんだけど。

「ディルクも、マテウスも元氣で。眞にも、お礼を言つていたと伝  
えてください」

「承知した。確かに伝えよ」

マテウスがこくりと深く頷く。

「さあ、そこに立つて。……勇者殿」

ディルクの口調が無機質なものへ変わつた。魔術師としてのスイ  
ッチが入つたのだ。

私は素直に頷いて、円陣の中心に向かつ。さようなら、リロレア  
王国。

「願わくば、あなたを包む世界が光で満ち溢れることを」

ディルクの言葉を最後に、私の視界は真っ白に染まつた。

## 2・今日から高校生に戻ります

いきなりだが、人が何の前触れもなく突然行方不明になつたとしたら、周囲はどう思うのだろう。一週間経つても連絡がなく、半年経つても手掛かりが見つからない。

財布や、身分証明証、携帯電話、身の回りの物を全部残して忽然と存在だけが消えてしまつたら。

たぶん当時は、ものすごい騒ぎになつたのだと思う。

けれど時間が経つにつれ、人は忘れていく。そういう事件があつたこと、女子高生がいたこと、友人がいたこと。

私が戻つた時、家族はぽかんと口を開けしばらく無言だった。友人は、腫れものに触るように「久し振り」と他人行儀になつっていた。

時の流れは、残酷だ。

あちらにいた期間は、向こうの単位で約一年。こちらでは五年。白髪混じりになつた親に号泣され、同級生たちは就職し、あるいは進学し、親戚の何人かはすでに亡くなつていた。

高校休学のまま、19歳と3ヶ月。戸籍上は22歳となつた私は、現在も未だに女子高生である。それを知つた時は泣きそうになつた。いや、ぶつちやけ少し泣いた。向こうでの別れも辛かつたけど、それより悲しかつた。悔しかつた。何より、友人に置いて行かれたことがどうしようもなく、辛かつた。

少しだけ、ディルクやマテウスを恨んだりもした。

おかしなことに、大騒ぎになつた親類や友人より、私が一番混乱していた。おかげで、五年間の空白をどんな言い訳をして誤魔化したか、記憶は曖昧だ。

勇者をしていました、とは言わなかつたけれど、用意していた諸々の口上は頭から消え、半ば逆ギレしてお茶を濁したような気がす

る。

あとで、さすがにマズイ」としたと思い、白亜の石を使って魔法修正をかけておいた。

私は「五年前のある日、事故に遭い」「記憶を失くし」「どこか別のところでお世話になっていた」「しかし唐突に記憶が戻ると同時に」「記憶を失っていた間の記憶を代わりに失つた」「家に戻つてきても五年も経つていたことには気づかなかつた」

と、こうにしてある。

22歳の女子高生つて苦しくないですか。体感時間一年前、可愛いと思つていた制服もちょっと尻込みしたくなるんですが。でも、「設定上」気分は女子高生のまま、ということなので照れくさいとか恥ずかしいとか言つてはいけない。

しばらくは以前の高校に通つていたけれど、居た堪れなくて転校することにした。ついでに、一人暮らしをすることにした。

ちょうど、区切りのいい冬休み前。4月から編入することにした私は、学校に通うのをやめバイトに明け暮れた。一人で立つために、お金が必要だつた。22歳女子高生、収入ゼロ。親のスネかじり。はさすがに我慢できなかつた。戸惑う家族と一緒にいるのも、苦痛だつた。

そうやつて、下準備をして。ようやく今日、3月29日。

私は、私を知らない高校で再び一年生からやり直すため、家を出る。玄関前で言葉少なに両親とあいさつをし、深く深くお辞儀をした。

「めんなさいと、ありがとうが、伝わればいい。

新しい我が家は、くすんだ赤い屋根の小さなアパート。築10年、エアコン完備。家賃6万、ただし駅からは若干遠い。自転車で、2

0分。歩いたら1時間。実家からは、車で2時間を欠ける。

引越しに持つてきたのは、収納用のキャビネット、ちゃぶ台、親戚から譲り受けたお古の冷蔵庫に、生活に必要な細々としたものが多々。

高校は、全日制だけど単位制という特殊な形態。探しに探しした、私服OKの学校だ。ミニスカートではしゃぐには、私はいろいろ経験しそうな気がする。異世界的な意味で。

ドラゴンと戦い、大臣たちと腹芸をし、社交ダンスをこなした。演説もしたし、一時的に一軍を率いていたこともある。うわあ、思い返すとなんてファンタジックかつ非現実的。それなんて映画、って感じだ。

それでも、白亜の石と私の記憶が、嘘ではないと言つていい。誰にも話せないような（きっと話したら、変人扱いされるような）この事実は、私の中だけで生き続けている。

荷物を整理し終わった部屋をぐるりと見まわし、息をついた。八畳の和室と、小さなキッチン、バストイレ。

キャビネットにちょこんと置かれた、魔力の気配 どこに行つても加工できないと言われた、綺麗な球の白亜石。

ここが、今日から私の家。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6949f/>

---

元勇者の普通の生活

2010年12月22日15時55分発行